

〈論文〉

近代日本における処方薬と売薬の変容

二谷 智子

要旨 日本医療史や日本薬業史では、とくに18世紀半ば(宝暦期)から富山売薬や日野売薬、田代売薬などの配置売薬業が盛んになり、売薬行商人が薬を広く日本各地に流通させたことを評価している。また長崎貿易を通じて日本に輸入した生薬の種類と数量から推計して、近世日本の「医薬の文化度」を考察する研究もある。しかし史料の限界もあって医薬の消費者側からの検討が未だ少ないため、近世近代日本の人々をめぐる医療状況は把握しづらい。そこで本稿では、一次史料を用いて1840年代から1930年代までの約100年間を分析時期として設定し、北海道と兵庫県の開業医の処方薬と、富山県の地方資産家に残された薬種商・薬局の「通帳」に記載される売薬・医療用品の分析を通じて医薬品の変容を具体的に示した。19世紀中葉から20世紀前半の日本では、開業医・薬種商・薬局で扱われた医薬は、近世期から服用された和漢薬生薬はその種類を減らしつつも根強く使われていたが、幕末期から明治期に新たに洋薬や政府官許の有名売薬、洗浄・除臭消毒剤の取扱いが増えるなど変化が明確で、この時期は人々に使われた医薬品の転換期であった。1930年前後には地方資産家が薬局で購入した医薬品や救急医療用品は、今日でも日常的に使われているものであった。

キーワード 近世日本, 近代日本, 処方薬, 売薬, 開業医, 薬種商, 薬局, 和漢薬, 洋薬, 医薬品, 日本薬局方, 医療用品

1. はじめに

富山売薬や日野売薬、田代売薬などの配置売薬業が盛んになり始めたのは、18世紀半ば(宝暦期頃)である。各地の配置売薬業の生産地は、商品経済が浸透しつつあった在郷町を中心に行商圈を広げ、薬を多くの家庭に置いて常備薬とした。近世日本の配置売薬の意義を、山脇悌二郎は「無医村がふつうのことであった時代に、まことに日本医薬文化史上、画期的であったと思う」と高く評価した¹⁾。このように近世中期以降の配置売薬業は、行商人が薬を広く一般

に流通させたことから、日本医療史や薬業史で高い評価を得てきた。日本各地の配置売薬業が生産・販売した売薬の配合内容に関しては多くの研究が積み重ねられてきたが、他方で同時期に各地の医師や薬種商がどのような薬を処方したかについては、十分には検討されてこなかった。この問題について山脇は²⁾、人と病気との戦いに関わった医薬の広さと深さ＝医薬の援助・救済度を「医療の文化度」と考え、近世日本の医療文化度を測るため、対外交易での生薬輸入量と生薬各種の薬効を当時普及していた薬方書や医書をもとに調査し、近世日本の多くの人々が罹った病気や流行病に関して、その治療薬の処方内容と配伍量を調べた。さらに、長崎からの生薬の輸入量の公式記録をもとに何人の患者が治療を受けることが可能であったかを推計して、近世日本の医薬の救済度を計ろうと試みた。つまり山脇は、これまで積み重ねられてきた江戸時代の対外貿易史の成果を医学史や薬学史とリンクさせて、当時の日本における医薬水準を推測しようとする新しい方法を採用したのである。

ただし山脇の方法で導き出された成果には、いまだし検討の余地があると思われる。第1に、医学や薬学の進展に留意して生薬の輸入量と薬効について詳細に調査されているが、徳川將軍の側近など特定身分の人々が限定的に輸入した薬物を除いて、山脇が設定した分析時期において生薬が販売された価格の推移、また社会的階層や地域によって享受しえた医薬の差異についての記述が少ない。生薬の輸入量をもとに当該期の闘病人口を推計した結果は、身分制などの社会経済的な差別のない状態を前提に計算されており、この意味で推計結果は江戸時代の医薬の救済度についてその「可能性」を示したものである。前述の山脇の言葉にある「人と病気の戦いにかかわった医薬のその広さと深さ」という意味を重視すると、近世期に貨幣と交換して生薬を入手して、実際にそれを治療に使うことができた人々は、一体どのくらい存在していたかを解明する必要がある。

第2に、近世日本の人々をめぐる医療状況、医薬状況の全体な歴史像を把握しづらい。山脇は、江戸時代の前期（17世紀）には京都・江戸・大坂の三都では店売で町人層に医薬が広がり浸透していくことを「医薬の縦広がり」と記述し、また江戸時代の中期（18世紀）から後期（19世紀）に行商売薬、特に配置売薬が盛んになり、配置網が日本全国に広がったことを「医薬が都市から地方に延びる」すなわち「医薬の横広がり」と述べて³⁾。しかしこのような認識を一面では示すのだが、山脇は江戸時代を「無医村がふつうのことであった時代」とも理解しているのである⁴⁾。つまり、医薬の日本国内での流通過程の分析と実際に医薬を買い求めて病いを治療した人々の具体的な事例分析が欠けているために、江戸時代の輸入薬の推移が当時の医療状況にどのように影響したのかについては曖昧な印象を残すのである。その原因は、山脇が詳しく述べた江戸時代の医学書・薬方書の知識をもとに実際に活動した医者や薬種商、売薬業者がどのくらい存在していたのか不明であることに加えて、医者や薬種商がどのような薬種を仕入れて処方し、どのような薬を販売したのかといった経営展開や⁵⁾、薬の消費者である病人や患者側からの検討をしていないことにあり、このため江戸時代の「医薬の文化度」の実相としてはやや理解し難い面があった。

勿論これらの問題点を地域別や時代別に分析して解明することは、とくに近世前期や中期の場合は、残されている歴史的資料の限界もあって難しいことは十分に承知している。

そこで本稿では、史料閲覧が可能な一次資料をもとに分析時期を1840年代（天保期）から1930（昭和期）年代までの約100年間、すなわち世界的に薬学の進歩が著しかった19世紀中葉から20世紀前半として、まず3名の開業医の史料をもとに医療サービスの供給者である医師が調達した医薬品の変遷を分析する。次に消費者が薬種商や薬局から購入した薬種・薬品の推移を富山県（越中国）射水郡新湊の宮林家の史料で確認する。これらの分析をもとに開業医と薬種屋・薬局が取り扱った医薬品を対比させて、19世紀中葉から20世紀前半の人々が使用した医薬品がどのように変容したのかに関して、3つの時期に区分して特徴をまとめる。

2. 村岡医院—北海道松前および北海道茅部郡森村—の事例

(1) 村岡啓斎と村岡格

村岡家は、代々松前藩医に任用された有力な医家である。幕末維新期から明治期に医者として活躍したのは、10代村岡啓斎と11代村岡格であった⁶⁾。

10代村岡啓斎は、能登羽咋郡風無村梁田莊九郎の三男で村岡家「旧記」には、「啓斎義信字三省号西海或称柳瀬郷桜井小膳武一之養子実ハ能州羽喰郡風無村梁田莊九郎三男(中略)啓斎十四才時医ヲ同郡川尻村渡辺新斎ニ学ビ其後和州下市中山隆屯ニ学其後京都竹中分輔及小森縫殿之助和気義啓門人ト相成三十才時天保七年丙申五月当国成相渡」とあり、啓斎は村岡家8代矩道の次女の入夫となった。それ以前に8代矩道は、9代玄眼を養子にして次女と娶わせたが、玄眼は1835（天保6）年に逃亡したため、村岡家は一時家禄を免じられた。1846（弘化3）年、10代啓斎がエトロフ島勤番として在勤中にアメリカ人7名が漂着し、翌47年3月に啓斎はアメリカ人を箱館まで護送する一行に加えられた。その折に啓斎は漂流者たちの病気を手当てし、その功績を認められ新組徒士格に列せられて銀10枚を賜った。このことにより再び村岡家は松前藩医に任じられ、1848（嘉永元）年4月から啓斎は藩主の側医を仰せ付けられ、その後に先手格となり、53年3月には御近習御医師を兼務するように命じられた。

11代村岡格は、1850（嘉永3）年に松前城下の福山で生まれた。兄の村岡敬三が勤学生として仙台藩の養賢堂で学んでいたが在学中に病気で亡くなったため、格が医師となって村岡家を継ぐことになったのである。1869（明治2）年6月、格は勤学生として上京したが、どこで医学を学んだのかは不明である。1870年11月には格は一時帰省し、再び上京する途中で函館に滞在中の71年1月に開拓使等外付属医師を申付けられた。だが翌1872年2月に格は依願退職して、その後有志を糾合して当時函館鶴岡町にあったフランス領事館を無料で借り受け、そこに共立医館を開いたのであった。

1871（明治4）年9月に開拓使顧問として来日した米国のケブロン書記件医師として来日したエルドリッジが72年4月に開拓使医師として函館病院に着任した。エルドリッジは1872年

8月に函館病院内に函館医学校を開設して生徒を募集したが、彼の最初の17名の生徒のなかに私費生として村岡格が含まれていた。函館医学校での講義や指導はエルドリッジが一人で担当し、これは1874年11月頃まで約2年間余り続いたが、エルドリッジが満期辞任した後で函館医学校は閉校したと言われる。村岡格が本格的に医学の修業をしたのはこの時期であった。格は1875年に福山（現在の松前）に戻り、医師として父の啓斎を手伝ったのである。「村岡格履歴書」によると、松前郡吉岡港に一人の医師もいなかったため、同志と協力して1876年10月に回春堂を起こした。父である啓斎は1878年10月に亡くなったが、息子である格は福山に帰って開業することなく、81年には北海道茅部郡森村の函館支庁管下第9公立病院に赴任したのである。1890年5月に村岡格は第9公立病院を辞任したが、同年8月に森村で村岡診療所を開業した。その後、1913（大正2）年に七飯村に村岡家が転居するまで、格は森村で開業医として活動した。村岡格は開業医としての活動のみならず、同地域の諸々の公共事業や殖産事業にも関わり、1923年に亡くなった。

（2）幕末維新期の処方薬と医療器具

村岡家の場合、10代の啓斎は松前城下の福山で、11代の格は茅部郡森村での医療活動が中心であったため、同一地域で使用された医薬品の変化を分析することは難しいのではあるが、幕末維新期を挟んだ前後の時期における村岡家の医薬品の仕入れ方法や、天保期から明治初年の処方薬の内容がわかる。

表1で村岡啓斎が正徳丸平助に依頼した薬種の注文を示した⁷⁾。啓斎の「服薬選書控」⁸⁾や「服薬調子控」⁹⁾には、松前城下の宿屋に滞在した船の船頭や水主の名前があり、その関係で啓斎は大坂に上る船の船頭に薬種の仕入れを委ねた。平助は薬種屋ではないため、「薬種注文書」¹⁰⁾を見ると薬種によっては細かな付記があった。薬種の品質については、10番の削象牙は「但し屑ニテ如雪品鋸クツハ入用無之」、11番の毛犀は「牛の角屑薄く相成候方、鋸クツハ入用無之候」、15番の大和上々當帰は「此品調當帰ト申品宜敷也」、21番の陳皮は「但し調陳皮不宜也」、56番の唐附子は「但し壺斤ニ付小粒ニ而も不苦候間、壺兩位ならば二三斤余り高値に相成候ハ、入用無之候」、81番のジキタリスは「新渡青葉古渡高直ハ入用無之候」、82番の沃顔鱗（ヨードカリ）は「但し雪白方形ノ品買入なし、若下直に相成候ハ、二壘ニ而はらへ有」と付記があった。薬種の価格にも留意しており、例えば1番の唐甘草は「但し立ニ而も切込ニ而も値段下直の方」、8番の唐桂枝は「但し下直に相成候」、28番の唐黄芩は「朝鮮ニテも下直の方」、46番の同種ヒゲは「高値に相成候得者入用無之候」と記されており、なるべく低価格の薬種を仕入れ、注文薬品が予定外に高価であるときには仕入をすることは無用であるとした。

清水藤太郎『日本薬学史』を参照して、村岡家が注文した薬品の種類をみると1～44番、47～74番、79番は東洋産生薬を主体とする和漢薬だが、45番の纈草、75番のホフマン鎮痛液、76番のセメンシーナ、78番の礪砂精、80番の蝸蛄石、81番のジキタリスは、和蘭方医が処方した所謂「蘭薬」と称された薬種である¹¹⁾。日本で何時どのような薬種が薬種問屋で販売されたか

表1 幕末維新时期村岡医院薬種注文一覧

番号	薬種名	数量	効能	番号	薬種名	数量	効能	番号	医療器具	数量
1	唐甘草	5斤	緩和薬	42	桃仁	1斤	通経・緩下薬	1	金創鍼	10本
2	片茯苓	15斤	利尿薬	43	三好白朮	3斤	利尿・発汗薬	2	大形葉切刀	1枚
3	半夏	5斤	鎮咳・去痰薬	44	調木遅	7斤	解熱・鎮痛薬	3	中型葉切刀	1枚
4	唐石膏	20斤	収斂・解熱薬	45	纏草	2斤	鎮痙薬	4	大形三積鍼	1本
5	唐蒼朮	5斤	発汗・利尿薬	46	同種ヒゲ	半斤		5	極細毛引鉄	1挺
6	鹿角霜	5斤	腰痛・吐血	47	人参	1斤	強壯薬	6	カテーテル (銀製)	1本
7	白燒角石	5斤		48	真白芷	半斤	鎮痛・鎮痙薬	7	カテーテル (ゴム製)	1本
8	唐桂枝	3斤	健胃薬	49	竹節人参	半斤	健胃・解熱薬	8	カテーテル (真鍮製)	1本
9	小卷薄皮土佐肉桂	10斤	冷え症用薬	50	五味子	1斤	強壯・鎮咳薬	9	スポイト	1挺
10	削象牙	2斤		51	近江細辛	5斤	鎮痛薬	10	舶来ゴムスポイト	1挺
11	毛犀	1斤		52	晒桔梗	3斤	鎮咳・去痰薬	11	半両入蛤貝	1,000
12	唐阿膠	1斤	止血薬	53	五島防風	1斤	解熱・鎮痛薬	12	無二膏貝	1,000
13	白山上黄蓮	2斤	健胃・消化薬	54	溢荆芥	1斤	解熱薬	13	唐紙	100枚
14	真呉茱萸	3斤	鎮痛薬	55	羌活	1斤	鎮痛薬	14	唐白紙	50枚
15	大和上々當帰	20斤	冷え症用薬	56	唐附子		鎮痛薬			
16	唐麻黄	5斤	発汗・鎮痛薬	57	白川附子	1斤	神経病薬			
17	大和磨川芎	15斤	鎮痛・鎮静薬	58	莪朮	1斤	健胃・消化薬			
18	鎌倉上々柴胡	7斤	解熱薬	59	錦葵葉	4斤	淋病薬			
19	輕粉	2箱	水銀粉	60	晒上々蜀葵根	5斤	緩和・包摂薬			
20	太棗	5斤	緩和強壯利尿薬	61	唐良薑	半斤	芳香性健胃薬			
21	陳皮	7斤	健胃・消化薬	62	砂香附子	4斤	頭痛薬			
22	知母	1斤	解熱薬	63	板椰子	3斤	健胃・消化薬			
23	楮脂	10斤	強壯薬	64	刻杜松木	7斤	発汗・利尿薬			
24	黄蠟	5斤	緩和包摂剤・乳剤	65	紫蘇子	1斤	解毒薬			
25	白蠟	3斤	緩和包摂剤・乳剤	66	瓜呂仁	1斤	解熱・鎮咳・鎮痛薬			
26	唐の土	5箱		67	瓜呂根	1斤	止渴・解熱薬			
27	刻茅根	7斤	利尿・強壯薬	68	唐木香	1斤	健胃薬			
28	唐黄芩	3斤	解熱・止瀉薬	69	苦薺	2斤	緩下薬			
29	種黄芩	5斤	解熱・止瀉薬	70	欵冬花	半斤	咳嗽薬			
30	芍薬	20斤	鎮痛薬	71	伊豆縮砂	半斤	健胃・止瀉薬			
31	芒硝	2箱	利尿薬	72	青葉藿香	小半斤	健胃薬			
32	山梔子	4斤	解熱薬	73	商陸	1斤	利尿薬			
33	唐連朮	1斤	解毒薬	74	硝石(加賀産)	1斤	解熱薬・洗薬			
34	牡丹皮	1斤	鎮痛・通痙薬	75	ホフマン鎮痛液	3両目	ヒステリ・神経性心悸			
35	龍旦草	2斤	健胃・苦味薬	76	セメンシーナ	1斤	駆虫薬			
36	滑石	5斤	消炎・利尿・止瀉薬	77	セメンシーナ塩	1両目				
37	麦門冬	2斤	鎮咳・去痰薬	78	礮砂精	3両目	止痢・去痰薬			
38	澤瀉	2斤	利尿・清涼薬	79	唐白檀	5両目	鎮痛・止瀉薬			
39	地黄	7斤	止血・強壯薬	80	蝸蝓石	5両				
40	小茴香	1斤	健胃・去痰薬	81	ジキタリス	2両目	強心薬			
41	杏仁	2斤	鎮咳・去痰薬	82	沃顔鱗 (ヨードカリ)	1壺	皮膚病・腺病・変質薬			

(出所) 村岡啓斎「薬種注文書」(村岡家文書#3-d-18, 森町教育委員会蔵)より作成。

(注) 効能は日野五七郎・一色直太郎『最新和漢薬物学』同済号書房, 1918年, 清水藤太郎『日本薬学史』南山堂, 1949年, 木村雄四郎『和漢薬の世界』第2版, 創元社, 1983年, 山脇悌二郎『近世日本の医薬文化』平凡社選書155, 平凡社, 1995年, 山本昇次郎『薬局必携 薬劑一斑』1887年を参照。

を具体的に示す史料の一つに、京都の薬種問屋某家の「正味帳」がある。この史料では1768（明和5）年から1865（慶応元）年の仕入薬種の変遷が分かるが、これによれば「蘭薬」は1830（天保元）年代にかなり記録されている¹²⁾。ただし80番の蝸蛄石は東洋産薬種で、欧州方面からのものではない¹³⁾。また82番の沃顛鹹などのヨード類もあったが、1854（安政4）から62（文久2）年10月まで長崎医学伝習所で教鞭をとったオランダ海軍二等軍医ボンペの通訳兼弟子の司馬凌海は、その著書『七新薬』（1862年）で当時のもっとも新しい薬物7品のひとつにヨードを挙げており¹⁴⁾、最幕末期から輸入され始めたヨードは、この表中で最も新しい洋薬であった。

村岡家が購入した医療器具にも細かな付記があり、表1の1番の金創鍼については啓斎が図を描いた上で、「面部縫二三本取合余り有之品ハ不宜候、外ニ如図針式本但し金創針なり」との添え書きがある。6番のカテーテルには「但し男子ニ用ル品 銀製」、7番のカテーテルには「舶来コム製右 同断」、8番のカテーテルには「真鍮ニ而キセル吹口ノ如ク」とあり、素材の異なるカテーテルを注文していた。9番のスポイトは「真鍮製長四寸位、但し金創など洗ノ節用ル品」と用途が明確で、10番の舶来ゴムスポイトは「直段格別高値に無之候ハ、頼上候」とあった。この「薬種注文書」が作成された正確な年代は不明だが、金創鍼など外科手術に使う器具があり、また幕末維新时期に日本にもたらされた沃顛鹹も記されていることを手掛かりに推察すると、少なくとも1869（明治2）年の函館戦争後以後の注文と思われる。

表2を見よう。これは10代村岡啓斎が患者ごとに処方した薬の数（服薬数）を記録した「服薬調子控帳」（1840（天保11）～52（嘉永5）年）¹⁵⁾と、患者ごとに処方薬名を記載した「診療手控」（1871（明治4）・72年）¹⁶⁾を基に、どのような薬がいつ頃から処方されたかを示すため、1840～52年のうち3年以上で見られた薬、1871年と72年の両方で見られた薬、1840～52年と71年・72年のそれぞれ両方で見られた薬を示した。ただし1852～70年は処方薬を記した史料がないために不明である。また大部分の「服薬調子控帳」は処方薬名が省略され、散剤・丸剤・搗剤・含剤・蒸薬・刻薬・吹薬・膏薬・煎薬・水薬・油薬など剤型ごとに何帖または何貝と使用服数が記されているのみであった。ただし例外的に処方名の明確な薬も散見できるが、表ではそれを集計した。ただし1842（天保13）年の「囚人薬服控簿」¹⁷⁾と46（弘化3）年の「服薬調子」¹⁸⁾には詳細に処方薬名が記録され、特に46年の「服薬調子」と71・72年の「診療手控」の処方薬の比較検討は、幕末維新时期において村岡啓斎の処方薬が洋薬輸入の影響を受けたか否かを知る手掛かりになる。

さて表2では、①1～34番は1840（天保11）～52（嘉永5）年と71（明治4）～72年の双方の時期で処方された薬であったが、②35～57番は明治初期の「診療手控」では使用が確認できない薬である。③58～74番は明治初期にのみ確認できる処方薬である。なかでも司馬凌海の『七新薬』に紹介された新薬のうちヨード、キニーネ、サントニン（セメンエン）、モルヒネの四品が明治初期に処方されていたこと注目したい¹⁹⁾。つまり村岡啓斎は最幕末期に輸入され始めた洋薬を明治初期に使用する一方で、従来からの漢方製剤も引き続き患者に対して処方していたのである。

表2 村岡医院主要処方薬一覧 (1840~52年, 1871・72年)

番号	薬名	効能	40年	41年	42年	43年	44年	45年	46年	47年	48年	49年	50年	51年	52年	番号	薬名	効能	71年	72年
1	エンサク (錠剤)	収斂薬	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
2	中黄 (後衛)	外用薬	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
3	フアント(フアントシヤトル)	外用薬	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
4	ハチク	解熱・止血薬	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
5	龍鱗丸		○						○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
6	消毒(丸)								○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
7	涼通			○					○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
8	青婦散					○	○		○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
9	水銀膏	梅毒・外用薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
10	ホフマン	鎮痛薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
11	芦会	健胃・緩下薬				○	○		○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
12	白雪								○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
13	後衛								○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
14	メラチンキ								○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
15	桂皮加述附	鎮痛薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
16	小青龍杏桔	鎮咳・去痰薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
17	小青龍湯	鎮咳・去痰薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
18	当婦芍薬散	鎮痛・鎮痙薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
19	瓜呂枳実散	健胃・苦味薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
20	七味良枳呉								○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
21	当婦四逆加呉生姜湯	冷え性用薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
22	加錦薬								○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
23	柴桂(柴胡桂枝湯)	解熱・鎮痛薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
24	葛根湯	発汗・解熱薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
25	批把薬湯	咳止薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
26	蠅鼠散(カンキリ散)	酸敗液排出							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
27	赤降汞(赤汞膏)	梅毒用薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
28	五積散	健胃・鎮痛薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
29	決明子	緩下・利尿薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
30	冰逢(硼) 酸	口中薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
31	バジリ(硬君王膏)	外用薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
32	アギ丸	鎮痛・去痰薬							○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
33	咽喉嗽剂								○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
34	含嗽水(剂)								○	○	○	○	○	○	○	→			○	○
35	テレキル		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	58	四逆散(湯)	鎮痛・鎮痙薬	○	○
36	白磁散		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	59	沃度搥剂	梅毒用薬	○	○
37	痛風油	痛風薬	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	60	沃度膏	梅毒用薬	○	○
38	止痛香(膏)	痛み止め	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	61	涼膈加石		○	○
39	サフラン	通経鎮痙薬	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	62	利咽緩和		○	○
40	アンテス		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	63	モルヒネ	鎮痛薬	○	○
41	人参	強壯薬	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	64	セメンエン	駆虫薬	○	○
42	猛汞散	梅毒用薬	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	65	加錦薬加硝石		○	○
43	蓬辰散		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	66	当婦四逆加呉丈	しもやけ薬	○	○
44	奇験膏	梅毒用薬	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	67	涼膈解毒	解毒薬	○	○
45	百中丸		○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	68	麻黄加成楼	解熱・鎮痛薬	○	○
46	カンタリス	ロイマチス性炎症							○	○	○	○	○	○	○	69	驅凡解毒石桔	解毒薬	○	○
47	金汞水	梅毒用薬							○	○	○	○	○	○	○	70	キナ塩(キニーネ)	解熱・健胃薬	○	○
48	発泡膏	外用薬							○	○	○	○	○	○	○	71	家方解毒	解毒薬	○	○
49	芙蓉丸	鎮痛・催眠剂							○	○	○	○	○	○	○	72	真武湯	健胃・強壯薬	○	○
50	眼蒸	洗眼薬							○	○	○	○	○	○	○	73	竜瀉		○	○
51	カラキス								○	○	○	○	○	○	○	74	糶不降気		○	○
52	打撲水	打ち身薬							○	○	○	○	○	○	○					
53	紫圓								○	○	○	○	○	○	○					
54	テリアカ	滋養強壯薬							○	○	○	○	○	○	○					
55	赤龍膏(丸)	外用薬							○	○	○	○	○	○	○					
56	伯州散	腫毒							○	○	○	○	○	○	○					
57	紫丸								○	○	○	○	○	○	○					

(出所) 各年度「服薬撰書控」「服薬調子」、明治4年「診療手控」(村岡家文書#3-d-1~16、#3-d-20、森町教育委員会蔵)より作成。

(注) 1840~52年のうち3ヶ年以上で見られた薬、71年と72年の両方で見られた薬、40~52年と71・72年のそれぞれ両方で見られた薬を示した。

○印が存在を示す。右欄の薬名の→は左に同じことを示す。効能欄は、江戸科学古典叢書25『水銀系薬物製法書九篇』恒和出版、1980年、江戸科学古典叢書26『三法方典』恒和出版、1980年、岡崎寛蔵「くすりの歴史」講談社、1976年、三橋博ほか編『生薬学(改訂第4版)』南江堂、1993年、山脇二郎『近世日本の医薬文化』平凡社選書155、平凡社、1995年等を参照した。なお、効能が不明の場合は空欄にした。

(3) 梅毒と処方薬の変化

村岡啓斎が残した1842(天保13)年の「囚人薬服控簿」には²⁰⁾、牢舎末吉の病状と処方薬が特別に詳しく記述されている。末吉は梅毒であった。この病例を手掛かりに村岡啓斎の処方薬について検討しよう。牢者末吉は、「正月(1842年-引用者)十一日ヨリ薬用黴毒症ニ而去十月中旬便毒腫脹其後消散,十二月中頃より下疳陰囊等ニ梅毒出痛腰脚脛等痛ミ」を訴えた。啓斎は、正月11日より「大解加杜木 三帖, 中黄 壹貝, 奇驗膏 貳貝」を処方し、その後3月23日まで末吉に煎薬219帖, 油薬73貝, 膏薬146貝を処方したことが確認される。すなわち啓斎は梅毒の治療に油薬「中黄」(表2中の2番)と膏薬「奇驗膏」(同表中44番)を使用した。「中黄」とはおそらく「中黄膏」の略と思われる。その成分は、ごま油, 宇金, 黄蠟, 黄柏で、急性化膿性皮膚疾患(はれもの)の初期, 打ち身, ねんざに効果があるとされた²¹⁾。なお大解加杜木と奇驗膏について処方内容とその機能は不明である。

近世日本の梅毒流行の実態と処方薬は、立川昭二・荻谷春夫・山脇悌二郎の研究に詳しい²²⁾。それらによれば近世中期の漢方医の治療法は、患部に清浄用煎薬を使用する程度の技術であったが、1775(安永4)年に来日したオランダ商館医ツンベルクによって水銀療法が紹介されて水銀駆梅法による治療が普及した。表2で、水銀を主成分とした薬は、3番のフラント, 9番の水銀膏, 31番のバジリ, 42番の猛汞散, 47番の金汞水がある。3番のフラントは、1803(文化3)年の中井厚沢著『升汞丹製法秘訣』に、「和蘭ニ『ブランドシッデル』ト云フ腐薬ノ事也, 焦灼シテ浸蝕スルノ薬ト云フノ義ナリ」とあり、啓斎は「ブランドシッデル」を略して「フラント」と記載したと思われる。この薬の機能は「病毒トナル処ノ悪液壞水ヲ吸引シテ外ニ泄スノ術ニ用ヒ或下疳腐食強キモノ又ハ附骨杯ノ類久シク腐爛シテ難瘡ノ症ニ洗ヒ薬ニ製シ用ユ, 或ハ疔ノ類又ハ狂犬咬傷ノ疵口ニ貼シテ腐爛セシメテ毒ヲ泄スニ用ユ」とある²³⁾。9番の水銀膏は、啓斎の記録には単に「水銀膏」と記されているが、橋本宗吉『蘭科内外三方法典』(1813(文化10)年, 以下『三法方典』と略)には硬膏部に蟾蜍水銀膏, 軟膏部には木香水銀膏が挙げられた²⁴⁾。前者の機能には「癩毒ノ骨痛ヲ治ス水銀倍増スルモノハ劇痛ヲ治ス」とあったが、後者は「疥癬其他肌層ノ諸患ニ塗り之ヲ治スル名声アリ」とされ、蟾蜍水銀膏が梅毒に有効であった。31番のバジリは『三法方典』によると和名「硬君王膏」と称し、「瘍腫ヲ熟膿ヲ且瘡穢ヲ排浄シテ癒ス」機能があるが、これに赤灰汞丹を配合すると「癩毒潰瘡ノ穢汚ヲ潔クシ膿ヲ白クメ濃厚」にさせた。42番の猛汞散と47番の金汞水はともに水銀を意味する「汞」を含み、とくに前者の猛汞散は「猛升汞丹」(ソッピルマート Sublimaat, 塩化第二水銀 $HgCl_2$, 和訳別名「腐食昇汞丹」)を意味すると思われる。『三法方典』では「腐食昇汞丹」について「曾テ内服スル事無シ, 能ク疣目ヲ穿チ瘡毒結テ頑悪ナル胼胝ヲナス者且キリールノ結抉ヲ援ク」とある²⁵⁾。水銀駆梅療法の薬だけでなく、村岡啓斎は古方医として有名な吉益東洞(1702(元禄15)~73(安永2)年)が賞用した56番の伯州散も用いた。伯州散は、古代から伝えられた日本固有の薬で、癰・疔などの腫毒を治すとされる。本来は外科手術を行うはずの悪瘡に効果があり、反鼻・津蟹・鹿角を黒焼して各等量を混和した動物生薬ばかりの散剤で、内服や軟膏

として外用にも用いられた²⁶⁾。

1871（明治4）～72年になると啓斎は伯州散や奇驗膏を処方せず、かわりに56番の沃度搗剂、60番の沃度膏、70番のキノ塩（キニーネ）が登場した。1868（慶応4）年4月から横浜開港場の梅毒病院で主任医師となった英国海軍軍医ニュートン（George Bruce Newton）の治療法には、強壯療法として「キニーネ」鉄（クエン酸キニーネ）・「ヨチネ」鉄舍利別（「ヨード」鉄舍利別）等の内服、水銀療法として青汞丸（青酸酸化汞に非ず水銀丸）・ドノバン氏液（ヨード砒素汞液）・プロメリー丸（甘汞、金硫黄、延胡索「エキス」より成る）、鉛灰散（水銀と石灰とを混じ散剂とせるもの）などの内服、沃度療法として「ヨードカーリー」内服があった²⁷⁾。沃度療法とは「水銀について有効なるものは沃度剂なり、而して第二期にありては発熱、頭痛、骨関節神経に発する梅毒性疾患を療するときに用ゆ」とあり、梅毒第2期（感染後3ヶ月～3年）に特有の症状である微熱、全身倦怠感を緩和するための療法であった。

村岡啓斎がヨードやキニーネによる治療法を知った経緯は不明であるが、以下の仮説が考えられる。北海道の開港場箱館では、1861（文久元）年に梅毒治療と貧民救薬を目的とした箱館医学所が山の上町の娼妓から金2,000両余りを借りて建てられた²⁸⁾。開拓使は箱館医学所での検梅治療の形態を引き継いだと思われ、村岡格がエルドリッジの下で医学を学んだ1872（明治5）～74年は、函館病院では梅毒検査を実施していた²⁹⁾。それゆえ息子の村岡格から啓斎は、当時梅毒治療に効果ありとされた洋薬の情報を得て、それを実際の治療に生かしていたと考えられる。

3. 関屋医院－北海道上磯郡上磯村一の事例

(1) 関屋八太郎と公立上磯病院

関屋八太郎は、1855（安政2）年8月に会津若松に生まれた³⁰⁾。関屋家は代々会津藩医を務めた家柄で1868（慶応4）年の会津戦争ときに八太郎は数え年14歳で、白虎隊を志願したが年齢が足りずに入隊できなかった。会津藩は官軍に敗れて1869（明治2）年に転封となり、現在の青森県に斗南藩3万石を与えられた。八太郎も父の関屋角太郎とともに青森県北郡野辺地町に転居した。斗南藩は、乏しい藩費のなかから費用を工面して藩内に数箇所の治療所を置き、主に戦傷患者の治療を行った³¹⁾。1871年に斗南藩が廃藩されたため、治療所の運営費用は公費で賄えなくなった。そこで病院や貧院を建てるための経費を捻出する方法が青森県当局に建議されたが、病院は設立されなかった。しかし翌1872年に1人あたり1年2分2朱を集めて一種の保険制度による会社病院が設立されることになり、73年1月から病院が開設された。このころ関屋八太郎は青森県立仮病院であった済衆社病院に就職して医学の勉強を始めた。八太郎が学んだ医学の内容を詳しく知ることができないが、1873年6月に改定された青森県立病院規則の第3条には「漢学者流の弊風ヲ廢シ日新窮理ノ西洋治療ヲ專ニ可致事」、また第13条には「病院輪講々議之節ハ院外医生欠席ナク参院可致事」とあることから、病院では患者の治療と同時

に「西洋治療」の講義が行われていた。

1875（明治8）年3月に関屋八太郎は済衆社病院を辞し、家族で函館へ転居したのちに同年4月単身上京して「東京飯田町住待医宮内廣方」に入塾し、2年間に亘って医学を修行した。ただし八太郎はこの時期に医師開業試験に合格して医師資格を取得したわけではない。1877年4月に東京から函館に戻り、同年12月に開拓使の医師募集に応募して函館病院で勤務した後、81年2月上磯村に第11公立病院が開設された時に院長として赴任した。そして1884年5月に八太郎は「医術ヲ以テ奉職セシ履歴」により資格を満たして医術開業免状を取得した³²⁾。医師免許は76年の内務省達乙第5号「医師開業試験ヲセシム」に定められた試験に合格すれば医術開業免状を得ることができたが、従来開業していた者は無試験で免状を得ることができた³³⁾。また1877年の内務省達乙第76号「医術ヲ以テ奉職スル者ハ試験ヲ須ヒス免状公布」により、官庁及び地方公立病院に勤務して医療または教授の任に当たるものは、志願して無試験で免状を交付されることとなり、八太郎もこの制度により公的資格を持つ医師となった³⁴⁾。

第11公立病院に赴任した八太郎の活動は、『函館新聞』1881（明治14）年4月10日付記事に紹介された³⁵⁾。それによれば開院当初の患者数は入院外来を合わせて100名ほどで、関屋八太郎医師が、昼夜の別なく患者に接したため、村民の信用が大きく、大変喜ばれていると報じている。またこの記事には、当時の患者の疾患の多くがリュウマチ、梅毒慢性病であるとしている。1882年3月10日に公立病院は所在する町村名をその名称とするよう変更され、第11公立病院は上磯病院と改称された。公立病院は、医師の供給難、地方勤務医の都市集中化、町村負担の増加などにより全道的に衰退し、公立上磯病院も1894年7月末に閉鎖された。同年8月1日に関屋八太郎は上磯村（1918（大正4）年から上磯町）下町で開業した。八太郎は開業医としての活動の傍ら村検疫委員・村会議員・町会議員・学校関係の公職など多方面で地域に貢献した。

（2）関屋医院の薬品購入

明治・大正・昭和戦前期の開業医は、通常は自分で診察し、処方箋を書いて薬を処方した。1889（明治22）年3月15日に法律10号「薬品営業並薬品取扱規則」（以下「薬律」と略）が制定され、翌90年3月1日に施行された。「薬律」は近代日本で初の総合的薬事法である。その第43条では、「医師自ラ診療スル患者ノ処方ニ限り、（中略）、自宅ニ於テ薬剤ヲ調合シ販売授与スルコトヲ得、此場合ニ於テハ第三十八条ノ監視ヲ受クヘシ、（中略）、医師タルノ証明書ヲ以テ薬剤師薬種商製薬者ヨリ毒薬劇薬ヲ買取ルコトヲ得」³⁶⁾と、医師は自ら調剤することを認められていた。日本で法的に医薬分業を定めたのは、1951（昭和26）年6月5日に制定された「医師法、歯科医師法及び薬事法の一部を改正する法律」であるが、その後も医療現場では医薬分業は進展しなかった³⁷⁾。

表3には関屋医院の「薬品受込簿」から購入頻度が高い薬品を一覧にした³⁸⁾。これを一瞥して分かるように関屋八太郎が処方した薬品は、そのほとんどが日本薬局方収載薬品である。また日本薬局方で毒薬・劇薬に分類された薬品も多く見られる。毒薬が5番の硫酸モルヒネ、7

表3 関屋医院主要薬品類購入期間および購入金額一覧

金額の単位:円

番号	薬品類名	適応	薬局方	期間	回数	金額	番号	薬品類名	適応	薬局方	期間	回数	金額
1	苦味上糖	(内) 健胃薬、健胃性合剤配合シテ用	1~5	1894~1930	35	31.06	51	甘草末	丸薬基礎薬、他薬ト配伍シ緩和調味	7	1891~1920	8	5.09
2	内研石精	(内) 痲瘋血、頭痛	1~6	1894~1929	35	47.70	52	綿紗皮	包帯材料	1~9	1891~1930	8	24.22
3	細布	包帯材料	1~6	1894~1929	35	47.70	53	綿紗皮	(内) 健胃・強壯薬	1~9	1891~1930	7	2.45
4	サラマ糖	矯味薬、散・錠剤ノ賦形薬	1~4	1894~1929	34	52.19	54	酸化亜鉛	(内) 小児用、痲瘋、濕疹、表皮剥	1~	1891~1926	7	2.27
5	腐蝕モルヒネ	(毒・内・外) 鎮痛・鎮痙薬	1~	1894~1929	33	109.34	55	酸化石炭	(内) 清涼・止瀉薬	1~	1891~1907	7	5.08
6	腐蝕マグネシウム	(内) 瀉下薬、痲瘋治療薬	1~	1894~1929	33	21.15	56	規方大黃丸	(内) 健胃・瀉下薬	2~5	1894~1900	7	16.78
7	規方モルヒネ	(毒・内・外) 鎮痛・鎮痙薬	1~	1894~1929	32	132.60	57	線創膏	(外) 皮膚保形劑	1~4	1894~1924	6	2.60
8	セントロニネ	(脚・内) 回虫除根薬	1~	1894~1929	32	72.58	58	制多己丁(ラタニアア丁)	(内) 強壯劑、止咳薬、單毒藥の代用品	3	1891~1916	6	2.29
9	酒酸セリウム	(脚・内) 鎮痙薬、鎮吐薬	1~	1894~1929	31	16.05	59	阿阿何布油(オレブ油)	乳劑、膏劑、線創膏	1~	1891~1909	6	2.60
10	酒酸セリウム	主として試薬用	4~5	1894~1929	31	15.64	60	ウウ何布油	(脚・内・外) 強壯劑、鎮痛・消炎薬	1~	1891~1905	6	3.01
11	白糖	矯味薬、散・錠剤ノ賦形薬	1~	1894~1929	30	11.21	61	酢酸鉛	(脚・内・外) 腸出血、收斂薬	1~8	1894~1923	5	1.37
12	白糖	矯味薬、散・錠剤ノ賦形薬	1~	1894~1929	29	22.59	62	カクタンクス末	(脚・内・外) 痲瘋、痲瘋、痲瘋、チンキ製造	2~8	1894~1923	5	1.39
13	塩酸加里	包帯材料	1~	1894~1929	28	16.81	63	抱水コロラール	(脚・内・外) 痲瘋・鎮痙劑	(1~)	1894~1912	5	0.68
14	脱脂綿	(内・外) 制痙薬、瀉下薬	1~	1894~1929	27	20.38	64	抱水コロラール	(脚・内・外) 痲瘋、痲瘋、痲瘋、痲瘋	(1~)	1894~1912	5	2.45
15	腐蝕マグネシウム	(内) マラリア特効薬、強壯薬	1~	1894~1929	26	12.40	65	次硝酸砒素	(内・外) 制痙薬、強壯薬	1~	1895~1912	11	40.04
16	腐蝕マグネシウム	(内) マラリア特効薬、強壯薬	1~	1894~1929	24	78.21	66	真骨(ラウ)	(脚・内) 鎮痙・鎮痙薬	2~	1895~1929	10	4.91
17	硫酸カリウム	散劑賦形薬、小児栄養剤付加料	1~	1894~1929	23	17.03	67	ウウ何布油	(内) 痲瘋薬	1~4	1895~1924	8	5.56
18	臭素(プローム)加里	(内) 鎮痙薬、鎮痙薬	1~	1894~1929	22	26.53	68	百布草	(内) 消化薬	1~5	1895~1923	8	7.55
19	アナンチロリン	(脚・内) 痲瘋・痲瘋	1~	1894~1929	22	32.71	69	百布草	防腐性包帯材料	3~8	1895~1924	7	5.55
20	石炭酸	(外) 患心・痲瘋、急性瘰癧、ロイマチス	1~	1894~1929	21	29.69	70	ボトヒ子(ボドフィルム脂)	(内) 瀉下薬	1~4	1895~1908	7	3.82
21	塩酸加里	(脚・内・外) 痲瘋薬、皮膚病、眼病	1~	1894~1929	21	32.22	71	塩酸カリウム	(内) マラリア特効薬、強壯薬	1~	1895~1930	6	8.48
22	アナンチロリン	(脚・内) 痲瘋・痲瘋薬	1~	1894~1929	20	56.37	72	泪草蘭丁機	(内) 健胃・通経・鎮痙薬	1~5	1895~1897	3	5.80
23	アナンチロリン	(脚・内) 痲瘋・痲瘋薬	1~	1894~1929	20	16.78	73	血清		6	1896~1925	21	156.43
24	クリセリン	(外) ビロ、痲、火傷、口唇乾燥、便軟	1~	1894~1929	20	19.12	74	オパール	(脚・内・外) 瀉下薬、痲瘋性瘰癧、濕疹	1~7	1896~1921	12	29.71
25	白糖	(内) 痲瘋和胃薬、軟膏劑製造用	1~	1894~1929	17	11.41	75	日本	(脚・内) 痲瘋・痲瘋薬	1~	1896~1920	6	3.65
26	保赤瀉瀉(エーテル精)	(内・外) 痲瘋薬、軟膏劑製造用	1~5	1894~1917	17	7.38	76	吐根末		1~	1896~1920	6	3.65
27	硝酸加里	(外) 防腐薬	1~	1894~1929	16	5.62	77	カルサカエリキソル		1~	1896	1	2.15
28	硝酸加里	(内) 防腐薬	1~	1894~1929	16	10.98	78	スコウカエリキソル	滋養・強壯劑	※	1896~1913	7	16.94
29	コロロホルム	(脚・内・外) 痲瘋薬、喉人痲瘋薬、神経痛	1~8	1894~1930	15	12.28	79	オゾラートン	痲瘋・包頭劑	1~	1901~1928	16	4.88
30	硝酸加里	(内・外) 痲瘋薬、喉人痲瘋薬、痲瘋	1~9	1894~1927	15	5.21	80	磷酸コデオン	(脚・内) 鎮痙・鎮痙・鎮痙薬	2~	1902~1928	19	27.37
31	楊酸加里	(内・外) 利尿薬、喘息発作	1~	1894~1929	15	18.81	81	ワセリン	(外) 軟膏劑	1~3	1908~1927	7	3.02
32	規方大黃丁	(内) 健胃・瀉下薬	1~5	1894~1929	15	5.05	82	ワセリン痲瘋	防腐性包帯材料	3~5	1909~1921	8	4.96
33	杏仁末	(脚・内) 鎮痙・鎮痙薬	2~	1894~1929	15	7.57	83	芥末ガゼ	(内) 氣管支喘息	※	1909~1924	2	3.70
34	芥子末	(外) 皮膚引赤薬、種充芥子油製造用	1~8	1894~1913	15	10.83	84	塩化アトレナリン	矯味薬、シロップ劑製造用	1~	1910~1930	13	6.36
35	薄荷油	(内・外) 興奮・健胃・散風・痲瘋・痲瘋	1~	1894~1929	13	5.70	85	肝油	矯味薬、シロップ劑製造用	1~	1910~1930	13	6.36
36	ミソデレ精	(内・外) 益汗・利尿薬	1~	1894~1929	13	8.56	86	肝油	滋養・強壯劑	1~	1911~1930	11	51.41
37	バルサム糞	(内・外) 痲瘋病、淋病薬、金創破傷	※	1894~1924	12	14.13	87	クレオソート	(内) 痲瘋核、胃腸内發酵(外)う菌	1~	1911~1930	6	5.62
38	製甘草	丸薬賦形薬	1~	1894~1930	11	4.20	88	麦芽エキス	(内・外) 子宮出及び子宮無力	1~	1912~1928	6	5.34
39	阿阿何布油	(脚・内) 止瀉・収斂薬	1~	1894~1929	11	4.22	89	蒸水	製薬原料、調劑、武薬調製用	1~	1913~1927	10	1.91
40	阿阿何布油	(脚・内・外) 嘔吐、胃痛、局所痲瘋薬	1~	1894~1913	11	10.32	90	アセチレン	(内) 解熱、ロイマチス	3	1913~1927	6	5.45
41	アセチレン	(外) 痲瘋、慢性炎症、毛風	1~	1894~1929	10	8.33	91	ペンタリン	腸收斂劑	3~	1915~1927	10	7.94
42	水銀軟膏	(外) 痲瘋、慢性炎症、毛風	1~	1894~1929	10	8.61	92	ペンタリン	腸收斂劑	3~	1915~1927	10	7.94
43	カメルレ(カミツレ)	(内) 苦味・健胃薬、瀉下劑	1~6	1894~1906	9	5.03	93	ナーフアルゲン	(脚・内) 止瀉・鎮痙・鎮痙・痲瘋薬	1~5	1918~1926	7	3.60
44	明麻仁紙	(参考) (外) 粘滯薬、温湿布料	7	1894~1925	9	2.08	94	トナフタルン	(内・外) 腸防痙薬、皮膚疾患、回虫薬	3~8	1919~1927	5	6.99
45	苦味上糖	(脚・内) 止瀉・鎮痙・鎮痙薬	1~	1894~1919	9	4.53	95	沃原カシウム注射液	痲瘋薬(ルゴール液)	1	1921~1924	3	8.58
46	阿阿何布油	(内) 痲瘋薬、他の軟膏性合剤ニ配合	4~6	1894~1912	9	2.37	96	安那加	強心利尿劑	1	1923~1927	5	2.55
47	阿阿何布油	(内) 痲瘋薬、痲瘋	1~	1894~1911	9	2.13	97	マクネン注射液	痲瘋薬、瀉下薬	1	1923~1927	5	2.55
48	番木糖	(内) 興奮性飲料	3~	1894~1928	8	9.75	98	ネオウリヒン脚氣注射液	脚氣治療薬	1	1923	1	3.00
49	番木糖	散・丸劑賦形薬	1~	1894~1925	8	3.49	99	ペーリバルサン	脚氣治療薬	1	1923	1	8.80
50	ゴム末	散・丸劑賦形薬	1~5	1894~1925	8	3.49					1923	1	2.24

(出所) 明治22年「薬品類受送簿」(関屋文書第21、北斗市教育委員会蔵)より作成。
 (注) 1894~1930年のうち、関屋医院が5年間に購入した薬品類および、1年間に2回以上購入した薬品類について、医療的適応と購入の帳簿に記載された期間、その年数(表では回数)、購入した合計金額を示した。医療的適応の欄は、石原弘編「薬物学」博文館、1901年、厚生省衛生局編「第五改正日本薬局方」(臨時改訂)日本薬局方、1962年を参照した。また薬局方は、薬局方取裁局蔵を、日本薬局百十年史、日本薬学会、1987年に掲載されている資料3「取裁目録」を参照。なお日本薬局の制定および改正年月は、制定された局方(1局)が1886年6月、改正局方(2局)が1891年5月、3次改正局方(3局)が1906年7月、4局が1920年12月、5局が1932年6月、「国民医薬品集」の巻頭「一覧表」を参照。なお日本薬局の制定および改正年月は、制定された局方(1局)が1886年6月、改正局方(2局)が1891年5月、3次改正局方(3局)が1906年7月、4局が1920年12月、5局が1932年6月、「国民医薬品集」の巻頭「一覧表」が1948年9月、「(第2改正)国民医薬品集」が1955年3月、6局は1951年3月、7局は1961年3月、8局は1971年4月、9局は1976年4月、10局は1981年4月である。例えば、「1~5」は「日本薬局方」の1局~5局に記載され、6局以降は記載されなかったことを示す。「1~」は1局以降継続して記載を意味する。

番の塩酸モルヒネの2品、劇薬が8番のサントニーネ、9番の蔞酸セリウム、19番のアンチピリン、20番の石炭酸、22番の沃度加里、23番のアンチヘブリン、29番のコロロホルム、33番の杏仁水、40番の塩酸コカイン、46番の阿片末、60番のヨウチン、61番の酢酸鉛、62番のカンタリス末、63番の抱水コロラール、64番のヨードフォルム、66番のロウト根、75番の甘汞、76番の吐根末、80番の燐酸コデーネ、93番のドーフルス散の20品と、毒薬・劇薬を合わせ使用頻度が高い薬品の4分の1弱を占めた。売薬の場合は、内務省衛生局が内規を作り、特に毒薬・劇薬・指定薬品の配合に関して配合量・使用目的・適応症に厳重な制限を設けた。原料薬の調製に制限のあった売薬と比べると関屋医院の購入薬品に毒薬・劇薬の使用頻度が高く、少なくとも明治初期に西洋医学を学び、明治中後期に開業医として活躍した医院を受診した患者は、開業医の処方薬と売薬（店舗売薬・配置売薬ともに）を比較して、症状に対する効果の即効性の差を実感したと思われる。

購入合計金額の上位は、1位は73番の血清の156.43円で購入回数は21回、以下同様に2位は7番の塩酸モルヒネの132.60円で32回、3位は5番の硫酸モルヒネの109.34円で33回、4位は16番の硫酸キニーネの78.21円で24回、5位は8番のサントニーネの72.58円で32回であった。また1回当たりの購入額で高額な薬品は、1位は98番のネオウリヒン脚気注射液が8.80円、2位は73番の血清で7.45円、3位は7番の塩酸モルヒネで4.14円、4位は65番の次硝酸蒼鉛で3.64円、5位は5番の硫酸モルヒネで3.31円であった。購入頻度、購入金額合計、1回あたりの購入額の3つの指標でみると、硫酸モルヒネと塩酸モルヒネが関屋にとって重要な薬品であった。ただし石原弘編『薬物学』（1901（明治34）年刊）には、「モルヒネの医療的応用」として「其効用重ニ唯症候的ニシテ又弊害少ナカラザルニモ拘ラズ、極メテ貴重ノ神薬ニシテ、之ナカリセバ医家モ其職務ヲ施スニ困苦スルモノタルハ、以下此ニ之ヲ言フヲ要セザルナリ」と指摘されており、モルヒネの処方病状の根本的治療ではなく、一時的な各種症状の緩和に優れた薬品と評価され、慢性的に使用すればモルヒネ中毒に陥るものであった³⁹⁾。19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパでは合成医薬品が続々と開発され、アスピリン、アンチピリン、アセトアニリド、フェナセチンなどの解熱鎮痛剤、ベンザミン、アミノ安息香酸エチル、プロカインなどの局所麻酔剤、催眠剤のバルビタールなど現在も使用されている薬剤が生産されるに至った⁴⁰⁾。外国から日本に新薬・新製剤が輸入され、また日本人の研究者による医学的発見および薬学的発見や新薬の開発も盛んに行われた。日露戦後から第一次世界大戦までの約10年間に国内の医薬産業が本格化しはじめ、カフェイン、ブロムワレリル尿素、駆梅剤サルバルサンの国産化が製造され、各種カルシウム剤が続出して万能薬としてもはやされた⁴¹⁾。

このような20世紀転換期の医薬品市場の変化は、北海道上磯村で開業していた関屋医院の「薬品類受込簿」にも、その影響を読み取ることができる。再び表3を見よう。まず78番のスコット乳薬であるが、その製造はロンドン・ニューヨーク製薬舗スコット及バウン、売捌所は横浜89番の日支テレング商会で、「日本国売所」は武田長兵衛商店であった。この薬品は治亜燐酸塩の肝油乳剤で栄養補強剤であるが、日本で発売することになった1889年にテレング商会は

スコット乳菓を医薬品であると主張したのだが、内務省衛生局はこれを医薬品ではなく売薬であると認定したため、売薬として発売されたのである⁴²⁾。また84番の塩化アドレナリンは、三共商店薬品部が1902年春に日本国内での一手販売先になった⁴³⁾。1900年に高峰讓吉と助手の上中啓三は、アメリカのパーク・デービス社からの委託で、副腎抽出液の有効成分を純粋な化学物質として精製して結晶化することに成功した。それがアドレナリンである。アドレナリンは、はじめは耳鼻科の止血用に使われたが、後には喘息発作の処置や心停止患者への心筋内注射に使われるようになり、今でも「現代医療の最前線で日常に使われている」、「今日の基礎医学の進展にあたって、根幹をなす生理活性物質」である⁴⁴⁾。さらに注射液に注目すると、関屋医院では1921年以降に注射液を購入したが、その内訳は95番の沃度カルヂーム注射液、96番の安那加、97番のマグネシン注射液、98番のネオウリヒン脚気注射液、99番のペーリバルサンである。医療用注射液の容器アンプルが安価で良質な国産品として製造されたのは1917（大正6）年の春頃といわれる⁴⁵⁾。73番の血清は、特異抗体を含む免疫血清を患者に注射して治療する医薬品であるが、これを1890年に北里柴三郎と独逸人ベーリング（Emil von Behring）が破傷風の治療に用い、その後はジフテリア・蛇毒にも用いられた⁴⁶⁾。その他の購入品では、包帯材料が3番の綿布、14番の脱脂綿、52番の綿紗、69番の沃度ガーゼ、83番の昇汞ガーゼの5品、矯味薬・賦形薬が4番のザラメ糖、12番の白糖、17番の乳糖、38番の製甘草、50番のゴム末、51番の甘草末、85番の単舎利別の7品、配合の基材薬品が1番の苦味丁幾、25番の白蠟、49番の葡萄酒、59番のオレフ油、81番のワセリンの5品であった。

ところで関屋医院はこれらの医薬品、医療材料や諸器具をどこから調達したのであろうか。関屋医院の薬品及び医療器械の仕入先と金額の推移を表4に示した。これによると関屋医院は開業した際に東京市徒士町の工進社から医療器械を一括して購入したことを除けば、それ以外の時期の購入品はすべて函館の薬種商、薬局、薬品医療器械問屋から入手していた。時期により医療器具や医薬品の調達先が異なっていた。医院開業後の3年間は、東京の工進社、函館大町の薬品医療器械問屋「いわしや」（桑原惣藏のちに小林乙五郎に継承）、函館大町の薬種・機械卸問屋網塚忠兵衛、函館大町の壽金堂薬舗常野壽次郎の4店から医薬品などを調達していたが、1897（明治30）年～1907年の10年間は常野壽次郎からのみ薬品を仕入れた。常野壽次郎から医薬品を調達したのは1908年で途絶え、同年関屋医院は再び「いわしや」との取引を始めた。その後は主に「いわしや」から医薬品を調達しながら、村林（一貫堂）、辻薬局、草刈北辰堂薬局、大村新太郎（各国薬品医療器械売薬問屋）、東洋薬局（薬品医療器械問屋）からも単発で取引した。合計仕入額の推移は、1894年～1901年に約80円～134円であったが、第一次世界大戦期の薬価高騰の影響があった時期をのぞけば、1902年以降は仕入れ額がそれ以前の約半分程度に減少した。この医薬品仕入額の変化の背景には、関屋医院のある周辺地域に開業医が増えるなど、地域の医療環境に変化が生まれていたことが指摘できる⁴⁷⁾。

関屋医院と比較するために表5に同じく北海道茅部郡森村の村岡医院の薬品類仕入先を示した。表5によれば森村で村岡医院が開業した1891（明治24）年から96年の間、村岡医院は「い

表4 関屋医院薬品類仕入先とその代価

単位：円

年	桑原惣蔵	網塚忠兵衛	常野壽治郎	工進社	合計
1894	44.25			89.72	133.97
1895	(73.19)	(26.47)		小林乙五郎	99.66
1896	8.59	(43.12)	(49.08)	27.63	128.41
1897			94.01		94.01
1898			(89.24)		89.24
1899			(79.16)		79.16
1900			109.67		109.67
1901			85.08		85.08
1902			59.35		59.35
1903			37.32		37.32
1904			35.34		[35.34]
1905			38.54		38.55
1906			23.45		25.71
1907			26.86		[26.86]
1908			19.33	25.41	[44.74]
1909				59.88	[59.88]
1910				47.38	[47.38]
1911	村林元吉			57.26	57.26
1912	1.13			43.73	[44.86]
1913				47.78	57.35
1914				39.06	[39.06]
1915				21.43	24.84
1916	辻薬局			32.07	34.36
1917	5.15			38.47	43.62
1918		草刈北辰堂		73.61	75.68
1919		1.99		(61.06)	63.05
1920				(85.12)	92.03
1921				45.43	75.87
1922	大村新太郎		東洋薬局	40.45	63.03
1923	1.75	4.82	13.09	49.30	68.96
1924			26.30		26.03
1925			14.40	32.73	47.13
1926			2.87	40.86	43.73
1927				15.63	15.63

(出所) 明治27年「薬品、器械及附属品ノ代価」, 「薬舗請求・領収書綴」(関屋家文書, 北斗市教育委員会蔵) より作成。

(注) () 内と1894~1922年の合計は, 明治27年「薬品、器械及附属品ノ代価」より。

それ以外は, 領収書金額を合計して推計。また, [] 内と1923~27年の合計も, 領収書金額を合計して推計。仕入先の住所と職種は以下の通り。

(小林は桑原の店を引き継いだと考えられる)

桑原惣蔵(いわしや): 函館区大町2番地

網塚忠兵衛: 函館区大町17番地, 薬種・器械卸問屋

常野壽治郎(壽金堂薬舗): 函館区大町35番地

工進社(職工連合): 東京市徒士町1-69

小林乙五郎(いわしや): 函館区大町2番地, 薬品医療器械問屋

村林元吉(一貫堂): 函館区地蔵町57番地

辻薬局: 函館市末広町二十間, 医家処方調剤薬品売薬営業

草刈北辰堂薬局: 函館市鶴岡町31番地

大村新太郎: 函館市末広町17番地, 各国薬品医療器械売薬問屋

東洋薬局(柴良雄): 函館市末広町35番地, 薬品医療器械問屋

表5 村岡医院薬品類仕入額仕入先別一覧

単位：円

年	いわしや	保阪商店	武藤器械店	大和商会
1891	66.87			
1892	74.39			
1893	51.94			
1894	82.57			
1895	82.14			
1896	80.48			
1897	80.30	38.45		
1904		41.79		
1905		53.99		
1906		43.54		
1907		61.03		
1908		20.76		
1909	網塚忠兵衛	11.43		
1913	38.90			
1914	114.59	下田弘濟堂	33.08	2.44
1915	73.65	1.09	1.18	0.22
1916	109.83	8.18	2.73	
1917	123.08			野村俊三
1918	169.60	1.36	3.20	3.84
1919	146.66	3.01		2.62
1920	205.86			2.78
1921	152.01		10.10	2.78
1922	117.56	1.45	13.53	2.78

(出所) 明治23年「薬品購入書類」, 「購入薬品簿」(村岡家文書, 森町教育委員会蔵)より作成。

(注) 1897年は1～9月分, 1904年は4～12月分, 09年は1～4月分, 13年は8～12月分, 仕入先のいわしやは, 1896年4月までの店主は桑原惣蔵で, 96年7月以降は小林乙三郎。

仕入先の住所・職種は以下の通りである。

いわしや：函館区大町2番地

保阪商店：茅部郡森村

網塚忠兵衛：函館区大町17番地, 薬種・器械卸問屋

武藤器械店：東京市本郷区新花町34番地, 医科器械商

大和商会：東京市日本橋区本石町1-9

下田弘濟堂：茅部郡森村, 薬舗

野村俊三：小樽区花園町公園通り, 薬種商・製薬業

なお, 網塚は, 函館区大町の薬店のほかに, 函館区若松町停車場前に, 網塚勉強堂薬局を設けており, その両方から村岡医院は薬品類を仕入れた。

わしや」からのみ薬品類を調達したが, 96年に地元の森村で保阪商店が開業すると, 村岡は「いわしや」との取引を止めて保阪商店からのみ薬品類を調達した。1913年以降は函館の網塚忠兵衛との取引が中心であったものの, その他に東京日本橋の大和商会, 武藤器械店(医療器械商), 森村の下田弘濟堂(薬舗), 小樽の野村俊三(薬種・製薬業)と複数の取引先から必要な医薬品類を調達していたのである。

関屋医院と村岡医院は, だいたい同時期に北海道で開業医として地域医療に尽力した。両者の薬品類の調達に関する共通点は, ①主要な取引先に函館所在の「いわしや」もしくは網塚忠

兵衛があり、②第一次世界大戦以降は複数の取引先をもったことである。一方で両者の相違点は、上磯村の関屋医院は開業時をのぞいて一貫して函館所在の薬品医療器械卸問屋から医療器具と薬品類を調達したが、森村の村岡医院は地元の薬局・薬舗のほかに東京や小樽の医療器械商や薬種商とも取引を行ったことにある。前述したように村岡格の父啓斎が活躍した幕末維新期には、松前城下にいた啓斎は薬種や医療器具を松前に寄港した北前船の船頭に委託して調達していた。時を経て1890年代後半以降の北海道では、開港場となった函館には薬種商・薬品医療器械卸問屋・薬局（薬舗）が多く存在した。そして函館は、上磯郡や茅部郡など函館の周辺部郡町村地域に所在した開業医にたいする薬品類の供給地となっていたことは指摘できる。ただし上磯村に比べると函館から距離的に遠い茅部郡森村の村岡医院は、地元森村における薬局の開業を機会に、地元の薬局を主な薬品類調達先に絞ったと思われる。ただし、第一次世界大戦期になると、関屋医院と村岡医院は両院ともに複数の取引相手を持つようになり、薬品類の調達先は変化した。

4. 廣橋医院—兵庫県揖保郡龍田村—の事例

廣橋源蔵は、1875（明治8）年3月に生まれたが、出生地は不明である。『日本医籍録』によれば、廣橋は「高校医学部卒」で1898年に医師免許を取得した⁴⁸⁾。彼は医師資格を取得した翌1899年に兵庫県揖保郡龍田村廣坂で開業した。廣橋源蔵は村岡格や関屋八太郎と異なり「高校医学部卒」で医師免許を取得して1940年代まで開業医として地域で活躍した。

廣橋家文書には、明治34年「処方録」があり⁴⁹⁾、廣橋医院が患者に処方した薬の内容が分かる。それを表6に示した。「処方録」には184方の処方薬と配合薬及び配合量、処方方法が記録されている。それには散剤・丸剤・軟膏剤・塗布剤・座薬剤・皮下注射液・吸入液・丁幾剤の8剤別に合計で94方の処方があり、そのうち主たる配合薬が共通する場合は、1つの処方を代表させて60方に絞った⁵⁰⁾。60方のうち、毒薬を配合した処方薬は8方（2番の鎮咳散、4番の莫比散、7番の鎮神散、12番のアトロヒネ丸、21番の撒汞丸、50番のアトロピン注射液、51番の莫比注射液、52番のストリキニーネ注射液）あり、毒薬と劇薬を配合した処方薬が1方（16番の砒結丸）のみ、劇薬を配合した処方薬が21方（5番の下腹散、6番の拵氏散、13番の麦角丸、19番の清腹丸虎烈刺予防丸、22番の沃苺丸、23番の結丸、24番の第一通経丸、26番の鎮神丸、27番の歇負林丸、29番の石炭酸軟膏、30番のヨードフォルム軟膏、40番の鎮痛液、41番の石炭酸阿列布油、42番の里斯林等分石炭酸、44番のミロン氏液、45番のルゴール氏液、46番の沃度仿謨坐薬、53番のピロカルピネ注射液、54番の麦角丸注射液、57番のクレオソート吸入液、60番の無職沃度丁幾）で、毒薬・劇薬を配合した処方薬が合計30方と、廣橋医院の代表的な処方薬の約5割を占めた。また表6に掲げた処方薬60方のうち1901年刊行の石原弘編『薬物学』⁵¹⁾に示された処方薬は33方に及んでおり、当時の西洋医学を学んだ医師が標準的に処方した薬を廣橋医院は使用していたのである。

表6 廣橋医院主要処方薬剤一覧

番号	処方	薬方名	種別	主要薬効成分	適応症
1	○	胃散	散	重曹, 硝蒼, 苘苳(ロート) 丸	胃潰瘍
2		鎮咳散	散	硫莫(毒), 菲汶斯(ヒオス) 丸	鎮咳薬
3		羯布羅散	散	精製樟腦, 乳糖	強心, 急性虚脱, 興奮薬
4		莫比散	散	塩酸モルヒネ(毒), 乳糖	疼痛, 鎮咳薬
5	○	下腹散	散	甘朮(劇), 約刺巴(ヤラツバ)	緩下剤
6	○	拵氏散	散	アヘン(劇), 吐根末(劇), 乳糖	腸カタル, 止瀉薬, 発汗
7	○	鎮神散	散	塩酸モルヒネ(毒), 乳糖	催眠薬
8	○	規鉄丸	丸	塩酸キニーネ, 還元鉄, 竜胆丸	健胃強壯剤
9		塩規丸	丸	塩酸キニーネ, 竜胆丸	解熱剤
10	○	第一下腹丸	丸	蘆薈, 薬用石礮	軟下剤
11		第二下腹丸	丸	大黃末, 薬用石礮	緩下剤
12		アトロピネ丸	丸	硫酸アトロピン(毒), 甘草末	発汗剤
13		麦角丸	丸	麦角丸(劇), 甘草末	子宮緊縮薬, 止血薬
14		撒曹丸	丸	撒曹, ゴム末	ロイマチス特效薬
15	○	抜爾撒謨丸	丸	コバイババルサム, 炭苦	治淋薬
16		砒結丸	丸	亜ヒ酸(毒), クレオソート(劇), 胡椒, 竜胆丸	マラリア, 慢性皮膚病ほか
17	○	阿魏丸	丸	阿魏丸, 竜胆末	鎮痙薬
18		緞草酸亜鉛丸(3局)	丸	緞草酸亜鉛, 甘草末, 竜胆丸	神経鎮痛薬
19		清腹丸虎烈刺予防丸	丸	胡椒末, 樟腦, アヘン末(劇), 塩酸コカイン(劇)	嘔吐, 胃痛, 止瀉・鎮痛薬
20		規蘆鉄丸	丸	塩酸キニーネ, 還元鉄, 蘆薈末	
21	○	撒朮丸	丸	サリチル酸朮(毒)	癩毒性疾患
22	○	沃苳丸	丸	沃別(劇), 苳苳丸, 竜胆末	癩毒性疾患
23	○	結丸	丸	クレオソート(劇), 甘草末, グリセリン	肺結核, 嘔吐, 下痢
24		第一通経丸	丸	ブローム樟腦(劇), 蘆薈, 還元鉄	鎮静・鎮痙薬
25		第三通経丸	丸	硫酸鉄, 甘草末	補血薬
26		鎮神丸	丸	ブローム樟腦(劇), 麦角丸(劇), 甘草末	神経症, 神経痛
27	○	歇負丸	丸	アンチヘブリン(劇), 甘草末, ゴム末	解熱・鎮痛薬
28	○	塩規丸	丸	硫酸キニーネ, 甘草	マラリア特效薬
29	○	石炭酸軟膏	膏	石炭酸(劇), 単軟膏	落屑性湿疹
30	○	ヨードフォルム軟膏	膏	ヨードホルム(劇), 単軟膏	火傷, 眼膜炎, 潰瘍面
31	○	硼酸軟膏	膏	硼酸, ワセリン	擦傷, 火傷, 湿疹
32		苳苳水銀軟膏	膏	苳苳丸, 水銀銍	癩毒性疾患
33	○	眼科用灰白ワセリン	膏	灰白軟膏, ワセリン	炎症性変化
34		羅代軟膏	膏	亜鉛花澱粉, ワセリン, サリチル酸	湿性皮膚疹, 擦傷, 慢性潰瘍
35		ウイルキンソン氏軟膏	膏	多兒, 硫黄花, 加里石礮, ワセリン	落屑性湿疹, 鱗屑癬
36		品川氏軟膏	膏	揚曹, 脂肪, ヒマシ油	
37	○	硼砂里斯林	塗布	硼砂, 里斯林(グリセリン)	口腔疾患, 傷口瘡
38		スカビエス膏油	塗布	ペルーバルサム, 蕁舎香, 阿列布油	疥癬薬
39	○	薄荷精	塗布	薄荷油, 酒精	胃痛, 吐瀉
40		鎮痛液	塗布	石炭酸(劇), 塩酸(劇), コカイン	
41	○	石炭酸阿列布油	塗布	石炭酸(劇), 阿列布油	手指, 器械の消毒
42	○	里斯林等分石炭酸	塗布	里斯林, 石炭酸(劇)	手指の消毒
43		石炭酸比知阿兒ワセリン	塗布	カルボルワセリン, 化チオール	
44		ミロン氏液	塗布	個亞那箇兒(劇), 沃度丁幾(劇), 里斯林	肺結核
45	○	ルゴール氏液	塗布	ヨード(劇), 沃度加里(劇), 里斯林	瘰孔, のう腫, 病的空洞
46	○	沃度仿讓坐薬	坐薬	鞣酸, 沃仿末(劇), 柯々阿脂	化膿腐敗性創傷
47		苳苳坐薬(3局)	坐薬	苳苳丸, 鞣酸	鎮痛・鎮痙薬
48		里斯林坐薬	坐薬	里斯林, 柯々阿脂	
49		羯布羅注射液	注射	羯布羅, 阿列布油	強心・興奮剤
50	○	アトロピン注射液(3局)	注射	硫酸アトロピン(毒), 餽水	汗分泌制止
51	○	莫比注射液	注射	塩酸モルヒネ(毒), 蒸留水	鎮痛・鎮痙薬
52	○	ストリキニーネ注射液	注射	硝酸ストリキニーネ(毒), 餽水	興奮薬
53	○	ピロカルピネ注射液	注射	塩酸ピロカルピネ(劇), 餽水	発汗薬
54		麦角丸注射液	注射	麦角丸(劇), 餽水, 石炭酸(劇)	子宮出血, 子宮無力
55	○	重曹吸入液	吸入	重曹, 餽水	制酸・変質薬
56	○	單寧吸入液	吸入	單寧, A	収斂薬
57	○	クレオソート吸入液	吸入	クレオソート(劇), A	肺結核, 胃腸内醗酵
58	○	安息香酸曹達吸入液	吸入	安息香酸曹達, A	祛痰薬
59	○	重塩水吸入液	吸入	重曹, 食塩, A	祛痰薬
60	○	無色沃度丁幾	丁幾	沃度(劇), 次亜硫酸曹達	腸胃炎治療

(出所) 明治34年「処方箋」(廣橋家文書, 筆者蔵)より作成。

(注) 廣橋医院が使用した主要薬方について, その主要薬効成分を示した。AはAqua(水)の略語と思われるが不明。種別の散は散製剤, 丸は丸製剤, 膏は軟膏製剤, 塗布は塗布剤, 坐薬は坐薬製剤, 注射は皮下注射液, 吸入は吸入液, 丁幾は丁幾製剤を示す。処方欄は, 石原弘編「薬物学」博文館, 1901年に, 同様の処方内容があるものに○印を付した。薬方名欄に(3局)と付した場合は, 1906年7月発令の第三改正日本薬局方で初めて収載された薬品を配合した薬方名。それ以外の薬方は, 主要成分が改正日本薬局方(1891年発令)及び1900年11月の内務省令第48号で追加された薬品を配合した薬品名。廣橋医院では, 開業時(1901年)の処方から, 薬局方改正や追補により新たに使用が許可された薬品を使用して処方内容を改変したと考えられる。適応欄は, 廣橋医院開業時の1901年と同時期に発行された前掲石原弘編「薬物学」を参照。同書に記載のない薬方・処方内容の場合は, 厚生省衛生局編纂「第五改正日本薬局方(臨時改定版)」財団法人日本衛生会, 1939年を参照。それでも不明の場合は空欄。また, 主要薬効成分には, 薬局方を参照して, 毒薬は(毒), 劇薬は(劇)を付した。

廣橋源蔵が使用した配合薬の主要薬効成分は、表3で検討した関屋医院の購入薬品と重なるものが多い。表3を参照すると、5番の硫酸モルヒネ、7番の塩酸モルヒネ、10番の酒精、11番の重炭酸曹達、16番の硫酸キニーネ、17番の乳糖、20番の石炭酸、21番の樟脳、22番の沃度加里、23番のアンチヘブリン、24番のグリセリン、27番の硼酸、35番の薄荷油、40番の塩酸コカイン、41番のサリチル酸、45番の大黃末、46番の阿片末、51番の甘草末、59番のオレフ油、64番のヨードフォルム、66番のロウト根、71番の塩酸キニーネ、75番の甘汞、76番の吐根末、81番のワセリン、87番のクレオソートの26品が、表6の処方薬の配合薬に使われていた。配合基材の59番のオレフ油、81番のワセリンや矯味薬・賦形剤の17番の乳糖、51番の甘草末、試薬の10番の酒精も含まれたが、廣橋医院も関屋医院と同様に処方薬の主薬として少量でも効き目の強い毒薬・劇薬を使用していた。1つの処方薬に使用される配合薬数は2～4品で、和漢薬を配合した生薬製剤を商品とした配置売薬と比較すると⁵²⁾、配合薬数はその半分以下と少ない。しかし、開業医の処方薬の適応症は明確であり、医師の診断が正確で間違いがなく、処方薬が患者の病症に適合すれば症状が早くに緩和した可能性が高かったと思われる。

5. 薬種商と薬局の販売薬の変容—富山県(越中国)射水郡新湊(放生津)の事例—

富山県射水郡新湊の有力地主の宮林彦九郎家には近世後期から昭和戦前期の「通帳」が残されている。「通帳」とは、小売商が消費者に「つけ」で販売した商品について、販売した日付・商品名・販売価格を記録した帳簿である。小売商は、多くの場合お盆と正月の直前に、「通帳」を顧客に渡して、それまでの期間に顧客が購入した商品代金の合計額を請求したのである。宮林家の1850年代(嘉永～安政期)から1920年代末までの医療関連支出の変化に関しては、中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』第3章で既に論じたが⁵³⁾、本稿では同家の「薬通帳」を素材にして、同家が購入した薬についてやや踏み込んだ検討を試みたい。

1860(万延元)年前後から1900年代に宮林家は、大部分の薬種(薬品)を地元放生津の野村屋(吉野)喜平から購入した。薬種商を家業とした吉野喜平は、漁場を所有するとともに、1887(明治20)年には約12町5反の土地を所有して⁵⁴⁾、1914(大正3)年の『日本全国商工人名録』に「薬種売薬製造、全国有名売薬特約(漁業)」とあり、吉野は薬種売薬販売と漁業を兼業していた⁵⁵⁾。しかし1929(昭和4)年頃になると、吉野喜平の「薬品御通」はなく、そのかわりに今泉薬局と泉田薬局の「御通」が宮林家に残されている。「通帳」の表書きにある薬局名と住所では、今泉薬局・泉田薬局ともに新湊町の薬局と確認できるが⁵⁶⁾、1930年版『大日本商工録』の「富山県の部」では、残念ながら射水郡新湊の薬局は確認できなかった⁵⁷⁾。

表7を見よう。宮林家が新湊で購入した商品のうち、1860年前後から1929年まで継続して購入した薬種はないことが確認できる。1859(安政6)年と61(文久元)年に購入した薬種50種はすべて生薬で、近世期に長崎貿易を通じて日本に輸入された生薬と国内産の生薬いわゆる和漢薬であった。このうち1889～1903年時点でも購入した薬種は、1番のサフラン、2番の丁子、

3番の白檀, 4番の麝香, 5番の龍腦, 6番の明礬, 7番の前胡, 8番の生腦, 9番の葛根, 10番の安神丸, 11番の赤龍丹と11種に減少した。一方で1889~1903年に新たに購入した薬品は, 51~85番の35品と増えている。

そこで, 宮林家がどのような薬を明治中期以降に購入したのかを確認しよう。1889(明治22)年にはじめて購入した薬品は52~59番の8品である。このなかに明治初頭に政府の官許を得て有名店舗で調製された売薬(例えば58番の精錡水と52番の宝丹)が含まれ, 精錡水は1867(慶応3)年に岸田吟香が米国宣教師で医師だったヘボンから処方を受託してもらって発売した点眼薬である⁵⁸⁾。精錡水の処方では主成分が硫酸亜鉛である。硫酸亜鉛は炎症を鎮めて傷を修復する作用がある。宝丹は口中清涼剤として岡本玄治の『家伝予集』(1671(寛文11)年)にすでに処方が確認されるが⁵⁹⁾, 近代以降の宝丹は「守田宝丹」と考えるのが妥当であろう。上野池之端で売薬業を営んだ9世守田治兵衛が, 文久期(1861~64年)にオランダ医師ボードインの処方をヒントに各種生薬を配合して発売した売薬が宝丹である。宝丹は1870年の売薬取締規則公布後, 政府の官許を受けた売薬第1号であった⁶⁰⁾。宝丹は, 処方内容に変化はあったものの, 現在でも販売されている。

次に1900(明治33)年代以降に宮林家が購入した薬品を表7で確認しよう。この時期に同家が新たに購入した薬品は, 51番の大学目薬と60番の蘭麝香~85番の鉄飴まで27種である。51番の大学目薬は, 1899年に田口参天堂から発売され, 精錡水と同様に硫酸亜鉛を主成分とし, 処方内容が変化したが現在でも販売されている⁶¹⁾。72番の烏犀円は, 漢方滋養強壯剤として中国宋代の医薬書『和剂局方』に処方が掲載された古来の名薬である。『和剂局方』が日本に伝わったのは鎌倉時代であるが, 同書は広く漢方医に用いられた。『和剂局方』に掲載があるでは烏犀円の処方では58種の生薬を配合したものであったが, 近世期の有名な佐賀売薬の「野中烏犀円」は10種程度の生薬を用いたもので, 滋養強壯剤としてのみならず救急薬として「ひきつけ」や毒消しの薬として使用されてきた⁶²⁾。80番の実母散は近世期から広く知られた婦人薬で, 更年期障害・血の道症・月経不順・冷え性などに効果がある「振出し薬」である。「実母散」は, このような機能を持つ売薬の一般的な方名であって, 売薬製造業者は誰でも使用することができたので, 第二次世界大戦前には200種以上の「実母散」が存在していた⁶³⁾。この時期に宮林家が購入した薬品には, 烏犀円や実母散など近世期から人々に親しまれ服用されてきた伝統的な売薬がある一方で, 合成医薬品のアンチピリン(日本薬局方第2局収載)を主要成分とした解熱・鎮痛剤の81番のアンチピリン丸, そのほかに63番の氷酢酸, 68番のキナチンキ, 73番のヨジュム(ヨード)チンキなど西洋由来の原料を使用した薬が登場している。この時期になると, 有名な店舗売薬は売薬卸取次店を通じて日本各地の薬局で購入できたので, 宮林家は日本各地で調製された有名売薬を入手していたのである。また注目したいのは清洗料として61番の石鹼, 漂白洗浄剤である62番の洗ソーダ, 除臭消毒剤の83番の硫酸鉄など様々な消毒殺菌洗浄剤を購入していることも, 宮林家の幕末期にはなかった特徴である。

最後に宮林家の1929(昭和4)年の購入薬品を見よう。表7によれば, 87番のアスピリン(解

熱鎮痛剤)、88番のグリセリン(皮膚保庇剤)、89番のオキシフル(殺菌消毒剤)、90番の石炭酸(フェノール)(防腐消毒剤)、97番のオブラート、101番のナフタリン(防虫剤)、102番の重曹(制酸・変質薬)などは今日でも身近な薬品であり、また105番の包帯、106番の眼帯、107番のガーゼ、108番の脱脂綿、109番の綿棒、110番の絆創膏、111番の氷枕は、今日家庭で常備されることが多い医薬部外品である。98番のホスビン(武田薬品)と99番のエキシカ(塩野義製薬)は、1927年頃に発売されたパップ剤の消炎鎮痛剤である⁶⁴⁾。日本国内の製薬会社が新薬・新製剤を本格的に開発し発売したのは、第一次世界大戦期以降であり、ヨーロッパからの薬品輸入が途絶し、それまでの輸入医薬品の代替品生産を中心に薬品製造業が本格的に勃興した。大阪の薬種仲買であった武田長兵衛商店や塩野義商店が、洋薬輸入卸販売から薬品精製・薬品小分をへて、独自の新薬・新製剤の開発・発売までに事業を拡大した⁶⁵⁾。その意味で宮林家が地元の薬局で購入したホスビンやエキシカは、日本の医薬品産業界の進展を象徴する商品であった。

6. おわりに

本稿では、19世紀中葉から20世紀前半の開業医の処方薬と薬種商・薬局の販売薬について4つの個別事例を検討してきた。開業医と薬種商・薬局が取り扱った薬品について、3つの時期に分けてその特徴をまとめる。

第1に近世後期から幕末維新期について、松前藩医であった村岡啓斎の「薬種注文帳」の内訳(表1)と金沢藩射水郡新湊の宮林家が地元の薬種屋から購入した薬種(表7)を比較すると、両者が双方ともに購入した薬種は16種類を数えた。これは1859(安政6)年と1861(文久元)年に宮林家が購入した50種の生薬の約3割を占めており、当該期は藩医と一般の人が購入した薬種に共通のものが多かった。もちろん両者を比べれば、異なる薬種や薬品を購入していたことは明白である。史料で判明した範囲で述べるとすれば、1840(天保11)年以降において村岡啓斎は水銀を主成分とした処方薬を用いて梅毒の患者を治療したが(表2参照)、これに対して宮林家は薬種屋から水銀を購入してはいない。水銀のように毒性の強い薬品は、医学と薬学の専門知識を持った医師による診断と適切な処置(手当て)が必要であったと思われる。このように近世後期から幕末維新期でも、医師の処方薬と薬種屋で消費者が購入する薬種には違いが見られた。また処方内容や配合量の加減で医師の処方薬と薬種屋から購入した薬種・合薬は、たとえ同じ方名でも同じ機能があったとは限らず、藩医・町医者・村医・薬種屋・合薬屋など多様な医療サービスを提供する者が存在していた地域では、病人は社会的身分と家計が許す範囲で医療サービスを選択しえた可能性がある⁶⁶⁾。

第2に1890年代から1900年代について、北海道と兵庫県の開業医が購入した薬品・処方薬(表3と表6)を比較すると、地域に関係なく開業医は日本薬局方収載薬品を原料薬として購入し、毒薬・劇薬など微量でも効果の強い薬品を主成分とする薬を処方していた。一方で薬の消費の

変化を宮林家の事例から読み解くと、表7に示す宮林家の購入薬品から分かるように、消費者が薬局から購入した薬品と売薬は、幕末維新时期から引き続いて生薬の和漢薬を購入していたが、その種類は50種から10種程度に減少した。それに代わるように明治政府が官許した有名な店舗売薬や日本薬局方に収載された洋薬を主成分とする薬品を宮林家は購入するなど大きな変化が見られる。さらに薬局からは石鹼や硫酸鉄など洗浄・除臭消毒剤なども購入した。近世後期から幕末維新时期と比較すると当該期は、開業医の処方薬と消費者が薬局から購入した薬品・売薬は、旧来より使用してきた和漢薬生薬を残しながらも、新たに洋薬や政府官許の有名売薬、洗浄・除臭消毒剤を購入しはじめ、消費者が求める薬品に大きな変化があった。

第3に1910年代から29年については、表3で関屋医院が10年代以降に初めて購入した薬品(表3の85~99番)と1929(昭和4)年に宮林家が薬局から購入した薬品(表7の86~111番)から以下の知見を得られる。関屋医院は、その購入回数は少ないが各種の注射液を購入するほかに、第3改正日本薬局方収載薬品のアスピリン・タンナルピン(タンニン酸アルブミン)・ナフタリンを購入し始めた。一方で宮林家の購入した薬品は、1900年代までに確認してきた内容とは明らかに変化している。すなわち和漢薬生薬は全く購入しておらず、アスピリン・オキシフル・クレゾール・ナフタリンなど日本薬局方収載薬品で今日でも日常的に使われている薬品を購入した。また包帯・眼帯・ガーゼ・脱脂綿・綿棒・絆創膏・氷枕など救急医療用品や、売薬では国内の医薬品メーカー製造のパップ剤(消炎鎮痛剤)を入手している。医療用品と解熱剤・防腐消毒殺菌剤・パップ剤を薬局から購入したことからみて、家庭救急医薬品(常備薬)を主に薬局で購入する今日の医薬品購入の原型が、少なくとも1930年前後の地方資産家の家庭では確立できた。

注

- 1) 山脇梯二郎『近世日本の医薬文化』平凡社選書155,平凡社,1995年,289頁。
- 2) 同上書291頁。
- 3) 同上書257頁。
- 4) 同上書289頁。
- 5) 薬種商の経営展開については高瀬重雄『薬種問屋松井家の歴史』松井伊兵衛発行,1975年,高瀬保『加賀藩流通史の研究』桂書房,1990年,884~894頁や近世期の大阪薬種仲買仲間起源がある製薬会社の社史などがある。また在村医の経営展開を明らかにした研究に、中島医家資料館・中島文書研究会編著『備前岡山の在村医中島家の歴史』思文閣出版,2015年があり,1808年~1876年に製売薬業を営んでいた中島家の売薬経営の内容が知られる。
- 6) 村岡啓斎と村岡格の経歴は、『北海道医師会史』北海道医師会,1979年,10-12頁と45頁を参照。
- 7) 村岡啓斎「薬種注文書」年代不明(#3-d-18,村岡家文書,森町教育委員会所蔵)。以下,村岡家文書には『村岡文庫目録』森町教育委員会編集・発行,1976年の目録番号を付す。
- 8) 「服数撰書控」(天保11年#3-d-1,天保13年#3-d-3,天保15年#3-d-4,#3-d-5,弘化2年#3-d-6,#3-d-7,村岡家文書)。
- 9) 弘化3年「服薬調子」(#3-d-8),弘化4年「服薬調子書」(#3-d-9),「服薬調子控」(嘉永元年#3-d-10,嘉永2年#3-d-11,#3-d-12,嘉永3年#3-d-13,嘉永4年#3-d-14),「服薬調子控帳」(嘉永5年#3-d-15,嘉永6年#3-d-16),村岡家文書。なお上記の史料は注8の「服

数撰書控」と内容は同じもので、本稿では、以後この種類の帳簿を一括して「服薬調子控帳」と称する。

- 10) 村岡啓斎「薬種注文書」（# 3 - d - 18, 村岡家文書）。以下、薬種と医療器具についての引用史料は全て「薬種注文書」である。
- 11) 清水藤太郎『日本薬学史』南山堂、1949年、第1章第5～10節を参照。
- 12) 岡崎寛蔵『くすりの歴史』講談社、1976年、179頁の第16表を参照。
- 13) 清水前掲書116頁を参照。
- 14) 清水前掲書296頁および岡崎前掲書215頁を参照。
- 15) 天保11～嘉永6年「服薬調子控帳」（# 3 - d - 1, # 3 - d - 3～16, 村岡家文書）。
- 16) 「診療手控」（# 3 - d - 20, 村岡家文書）。
- 17) 天保13年「囚人薬服控簿」（# 3 - d - 2, 村岡家文書）。
- 18) 弘化3年「服薬調子」（# 3 - d - 8, 村岡家文書）。
- 19) 岡崎前掲書214頁を参照。
- 20) 天保13年「囚人薬服控簿」（# 3 - d - 2, 村岡家文書）。
- 21) 岡崎前掲書308頁を参照。
- 22) 立川昭二『江戸病草紙』筑摩書房、1998年、81 - 85頁、176 - 198頁と菊谷春朗『江戸の性病』三一書房、1993年ならび山脇前掲書7 - 34頁を参照。
- 23) 江戸科学古典叢書25『水銀系薬物製法書九編』恒和出版、1980年、299 - 300頁参照。
- 24) 以下は、江戸科学古典叢書26『三方法典』恒和出版、1980年、300 - 316頁を参照。
- 25) 同上書403頁を参照。
- 26) 清水前掲書150頁および岡崎前掲書128頁を参照。
- 27) 菊谷前掲書120 - 125頁を参照。
- 28) 前掲『北海道医師会史』26 - 27頁を参照。
- 29) 阿部龍夫『市立函館病院百年史』無風帯社、1964年、47 - 48頁を参照。
- 30) 以下、特に断らない限り関屋八太郎の履歴は、明治10年「日誌 第㊦号」（関屋家文書# 4, 北斗市教育委員会所蔵）を参考にした。関屋家文書には『関屋八太郎資料目録』（上磯町教育委員会編集・発行、1985年）の目録番号を付す。
- 31) 日本科学史学会編『日本科学技術史大系24 医学〈1〉』第一法規出版株式会社、1969年、153-155頁を参照。
- 32) 明治17年「医術開業免状」（関屋家文書# 601）。
- 33) 前掲『医制百年史 記述編』64頁を参照。
- 34) 前掲『北海道医師会史』60頁を参照。
- 35) 以下、上磯村での関屋八太郎の活動や上磯病院については、『上磯町史』下巻、上磯町、1997年、799 - 803頁を参照。
- 36) 前掲『医制百年史 資料編』371頁を参照。
- 37) 前掲『医制百年史 記述編』411頁を参照。
- 38) 明治27～昭和初年「薬品類受込簿」（関屋家文書# 21）。
- 39) 石原弘編『薬物学』博分館、1901年、823頁を参照。
- 40) 日本薬局方百年史編纂委員会編『日本薬局方百年史』日本公定書協会、1987年、37頁を参照。
- 41) 同上書、48頁を参照。
- 42) 社史編纂委員会編『武田百八十年史』森本寛三郎、1962年、100頁を参照。
- 43) 三共九十年史編集委員会編『三共九十年史』三共株式会社、1990年、4 - 5頁を参照。
- 44) 飯沼和正・菅野富夫『高峰譲吉の生涯』朝日選書666, 朝日新聞社、2000年、第13章および298頁と302頁を参照。
- 45) 「日本の新薬史」刊行会編『日本の新薬史』薬事時報社、1969年、213頁を参照。
- 46) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』下、岩波書店、第4版、1986年、911 - 918頁を参照。
- 47) 二谷智子「近代日本における医療費と医療状況の展開」『経済学研究（愛知学院大学）』第4巻第2号、2017年、54 - 58頁を参照。
- 48) 本田六介編纂『日本医籍録』医事時論社、1926年、兵庫県52頁。
- 49) 明治34年「処方録」（廣橋家文書、筆者蔵）。
- 50) 「処方録」には8製剤のほか、「雑部」として90方の処方薬があったが省略した。
- 51) 石原前掲書を参照。
- 52) 二谷智子「大正期における富山売薬業の「製剤統一」と生産構造の変容」『土地制度史学』第166号、2000年1月、32頁参照。
- 53) 中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』吉川弘文館、2018年、第3章を参照。

- 54) 新湊市史編さん委員会編『新湊市史 近現代』新湊市, 1992年, 313頁を参照。
- 55) 渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧 富山・石川・福井編』日本図書センター, 1997年, 325頁。
- 56) 昭和4年「御通」今泉薬局, 昭和4年「御通」泉田薬局(宮林家文書, 宮林家蔵)。
- 57) 前掲『都道府県別資産家地主総覧 富山・石川・福井編』を参照。
- 58) 岡崎前掲書232頁を参照。
- 59) 岡崎前掲書123 - 125頁を参照。
- 60) 山崎光夫『日本の名薬』文春文庫, 文藝春秋, 2004年, 30 - 32頁を参照。
- 61) 同上書, 190 - 191頁を参照。
- 62) 同上書, 216 - 219頁を参照。
- 63) 同上書, 150 - 155頁を参照。
- 64) 二代塩野義三郎伝編纂委員会編『二代塩野義三郎』塩野義製薬株式会社, 1961年, 79 - 80頁を参照。ホスピンとエキシカは新聞広告, 販売ともに2社の競合が激しく, 1929年に塩野義商店と武田長兵衛商店の間で協定が成立し, 製造販売の統制機関(カルテル)として二巴(ふたば)合名会社が作られた。ホスピンとエキシカは消滅し「エキホス」と名付けられ, 生産量は均等化し, 価格や発売日など販売条件も同一になった。
- 65) 同上『二代塩野義三郎伝』27頁 - 59頁, 前掲『武田百八十年史』第2部第5・6章を参照。
- 66) 本村希代「近江商人正野玄三家の合業流通」『経営史学』第39巻第3号, 2004年, 68頁を参照。

[付記] 本稿作成にあたり, 史料閲覧に際し, 宮林家の皆様, 森町教育委員会, 上磯町(現北斗市)教育委員会, 高岡市立中央図書館に大変お世話になった。記して感謝申し上げます。